

半テン・仕事着のはなし

日野善太郎

尼崎のある土建屋では、毎年、盆と正月になると、若い衆に作業服を支給するのが習慣になっている。

昔はどこでもやっていたことだが、今は大手の元請は別として、下請の親方の間では、年々こういう習慣はすたれていくようだし、不景気なおりから、こういう習慣が一部にまだ残っていることは悪い話じゃない。

今年の、ではなくて去年の正月のことだけれど、その尼崎の親方が番頭に相談した。

「前の年は不景気で、正月の作業服の支給をせんかったから、今年も不景気やけどこしらえよう思うんや。どないや」

「そら結構なんなあ、みんなも喜びまっせ」

「一昨年の防寒ジャンパーで、その前の年は手甲シャツやった。今年は何にしよう。みんなはどっちを喜ぶやろ。」

ワイの見たところでは、みんな一昨年の防寒ジャンパーをまだ着るとるよりやし、あまりいたんでもおらんよりやけどなあ」

「防寒ジャンパーは、仕事によっては着とらんからでっしゃろ。あれを着ると体の自由がきかんさかい、堀り方とか、足場組みとかのときにはぬいでいるようでんな」

「そうかて手甲シャツやったら、着の連中はええが、土工の連中にはむかんやろ」

「そんなこともないと思いまっけど」

「いっそ、ふつりのカーキ色の作業服にしよか。元請の監督連中が着てるやろ。あんなんにウチのネーム入れたらどないや。ズボンを付けて上下そろいにしたら、けっこり引き立つんと違ひかな」

「それやったら、半テンはどないだ。正月にみんながそ

ろいの紺の半テンやったら、イキでよろしいのと違ひまっか」

「うーん、半テンなア。あれは、そやけど何やらヤクザみたいやなア。ウチは堅気の土建業なんやからなア」

話がここへきて、番頭は首をひねった。

「半テンがやくざの制服みたいに言うなんて、おかしなこと言うなア。親方は若いときに東映の健さん映画を見すぎたんと違ひやろか。」

その筈。この土建屋は万博以後に大きくなった店で、親方も三十五、六。まだ若いから古いことは知らないの

で、半テンのこともそんな程度の知識しかなかったのだ。今ではすっかり廃れてしまつて、どこの現場へ行つても、半テン姿にお目にかかることはまずなくなつてしまつた。東京あたりの薦が何か儀式めいたときに着るとか、或いは祭りのハッピーぐらいしか、もう見られなくなつてしまつたけれど、二、三十年前までは、半テン着は珍し

くなかつた。

昔、半テンは下丁、左官など職人の制服みたいなものだった。礼服であり、ふだん着であり、仕事着だった。土方も職人だから半テンを着た。半テン着といえは職人のことだった。勿論、ヤクザとは関係ない。

半テンの歴史みたいなものを書けば長くなる。かいっ

まんや書え、武家が仲間に着せたハッピーがはじまりだろうと思う。時代別映画なんかで鎗持奴などが着ているやつだ。

槍持奴などは脊が高くたくましいほど、主人が違はうに見える。「かごかき」だつて大男の方が「かご」に乗る主人には都合がいい。「かごかき」の脊が低くかつたら、「かご」が地面を引きずっているようでかつこ悪い。だから昔の武家にやとわれる「かごかき」は脊の高さで賃金が違つた。

そういう槍持奴や「かごかき」は筋肉りゅうりゅうとしていた方が本人の自慢でもあり、主人の武家の見栄にもなつたから、着ている物で肉体美をかくすより、むしろ寸たらずな物を着て（着せて）たくましさ強調する必要があつた。そこで考え出されたのが、脊中に大きく家紋を染め出したハッピーだ。

ハッピーは法被とも書くけれど、半被とも書く。つまりふつりの着物の半分の布で出来るという意味なのだ。半テンも字に書けば同じ意味だ。それだけ安いということでもある。

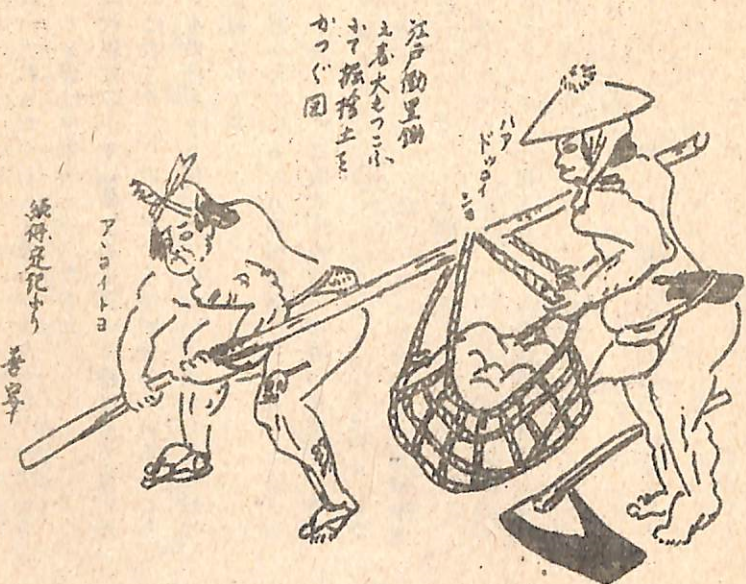
ハッピーと半テンの違いも書けば長くなる。祭りのときに着るすそが腰までしかないのがハッピーで、昔の火消しが着た少しすそが長いのが半テンだと思つてもいいが、

同じものを別の呼び方をしていると思ってもいい。

武家の仲間、小者が着たハッピが、職人の半テンになったのは、享保年間、今から約二百五十年前ぐらい、大岡越前守の頃からだと思われる。それまで幕府や大名の火消しばかりだったのが、ようやく町火消しの制度ができた。民間の消防団だ。

町火消しは薪の者といわれて、後の薪職人の起源にもなったが、町内から渡される賃金は、それだけでは暮せないほど安かった。そこで町内の商家の店番をしたり、どぶさらいをしたり、建設工事があれば地固め(基礎工事)や、足場を組んだりして生活した。薪の者のことを悪くいうとき「どぶさらい」というのはそのためだ。だから江戸時代の薪は、今の薪職と違って、火消しでもあり、土方でもあったわけだ。そこで仕事師ともよばれていた。ところで、この町火消しの薪には、町内から印半テンが、三年に一度ぐらい支給されていた。いろは四十八組というその組々の印が染めてあった。この半テンを着ていると、芝居と角力と寄席が無料入場できるという特権が与えられていた。賃金が安いからその見返りということでもあったのだが、薪の者にすれば誇り高い制服であつたわけだ。

各町内では他町に負けじと半テンのデザインを競った



し、火事場などで目立つように工夫されたから、印半テンを見れば、どこの組の薪かすぐわかった。イキとイナセを誇る江戸っ子の心意気である。

正月とか、祝いごとのあるとき、紺の香りも真新しい揃いの半テンで薪の者が集まり、木やりをうたったり、シャンシャンシャンと手をしめたりすると、そのカッコよさに江戸の娘たちはしびれてしまった。

しびれてしまったのは娘たちだけじゃあない。半テンの風俗は、薪の者だけでなく、大工、左官、土方と職人たち一般にひろがっていった。江戸ばかりではない。江戸以外の町にも日本中にひろまっていった。江戸時代の末頃になると、職人と半テンは切っても切れない仲になつてしまった。

半テンは職人の礼服でもあり、ふだん着でもあり、仕事着でもあると前に書いた。しかし一帯の半テンで何もかもすませていたのではない。そこにはおのずから区別があった。

仕事場の往復には新しい半テンを着、仕事場では古いのと着替えた。礼服やふだん着には袖の広い半テン、仕事場では筒袖のを着るということもあった。

さて、ここで二枚の絵をお目にかける。幕府が印磨沼の干拓工事をしたときのことを記録した「続保定記」と



いう文書(成田図書館蔵)の中の黒鯢者の絵だ。黒鯢者についてはいずれまたくわしく書くつもりだが、今でいう土方のことを昔は黒鯢者と言ったのだ。

江戸時代以前の土木建築工事を描いた絵は少ないが、たいていは大工や左官の絵で、土方が働いているところを描いたものはあまり伝わっていない。だからこの絵は貴重な記録なのである。

ここに描かれている六人の黒鯢者は、六人ともハダカでふんどし姿、中には腰に手ぬぐいを巻いただけの者もあるし、それさえなくてスッポンボンの者もある。しかしハダシは一人だけで、あとの五人は足袋かワラジをきちんとはいて、足をしらはしつかりしている。

笠をかぶった者がいるから、この絵は夏の暑い盛りの写生とも思えるが、干拓工事はアヒル艦隊で泥だらけになる仕事が多いから、ハダカの方が都合がよかったのだと考えた方が正解かもしれない。

竹田米吉さんの「職人―建築職人の回想―」を讀むと、明治時代の土方について

「朝は半テン一枚で震えながら部屋を出て、仕事場に行く。朝は半テン一枚で震えながら部屋を出て、仕事場に行く。もちろん当時の土工の習慣どおり、仕事に取り掛れば、寒中でもほとんど裸に等しい半テン一枚で仕事をする」

ついでだから思いついたことを三つばかり書いておく。近頃はジーンパンや、ベトコンズボンも土方の現場でよく見かける。近頃はでなくて、大分以前からと言、た方がいいかもしれないが、そういう平ズボンが悪いというのではなく、ズボンのすそを長靴や靴下の中に巻きこんだ方がいい。見た目のことでなく、ズボンのすそがひらひらしていると現場ではケガのもとになりやすいからだ。土方仕事になれない人が、ズック靴で現場へ出ているのも、ときどき見かける。あれもできれば地下足袋にかえた方がいいと思う。ズックは靴の中に砂や小石などが入りやすく、ぬげやすい。疲れやすいし、ケガのもとにもなるから結局は自分の損になるのだ。

と書かれているから、江戸時代の黒鯢者もそれとあまり変りはなかったのだろう。

昔の土方は夜明け前に部屋を出て、日が落ちてまた仕事場にいたそうだから、仕事場での服装がふだんの服装ということになる。仕事以外の時間は、部屋で酒を飲むか、バクチをするか、あとは寝るだけなのだから、印巴沼の黒鯢者たちは年中裸で暮らしていたのかもしれない。もう一度絵にもどると、ここに描かれているモッコは、大三尺といつて三尺二寸角(一米四方)の土方モッコだ。

絵の説明があつて「三、四十貫目(約百二十キロから百五十キロ)から、水のついた土なら七十貫目(約二百八十キロ)もかつぐそうだ」と書いてある。昔の土方の体力のすさまじさが思いやられるというものだ。

さて、半テンのことから話があらちこへ飛んでしまった。ここらでもとへもどして、しめくくらねばなるまい。最初に出た尼崎の土建屋の話だ。結局、去年の正月は香頭の煮見は採用されず、防寒ジャンパーと作業服の両方が支給されることになった。番頭も半テンにこだわらなかつた。時代とともに世の中も変わるのだから、職人の世界から半テンが消えるのも(さみしいことだけれど)仕方がない、と思つたのである。

現場監督がよくはいている安全靴は建築現場などには向くかもしれない。重いのが難点だが丈夫で長持ちする。釘などふんでも平気だ。地下足袋よりねだんが高いが、丈夫で長持ちするだけトクかもしれない。但し、高所作業などには向かない。

軍手をはめて仕事をする人は多いが、手甲をする人は少なくなった。高職でなくても、土方でも大工でも左官でもおすすめしたい。たとえば丸太やバタ角をはこぶとき、手首をすりむいたりするのを防ぐ、仕事がやりやすくなるということは、疲れも少なくてすむ。いらなるときはポケットに入るくらい小さいものだし、ねだんも決して高くはないのだから、もつていて損ではないと思う。